

学芸活動実践論

資料紹介展「ふるさとと北米の植物」の
実践とアンケート調査より

小野木三郎

Practical discussion of Museum activities
based on the exhibition of
“Native plants and North American plants”
and the results of questionnaire

Saburo ONOGI

1 はじめに

博物館職員を、博物館の目的と手段という観点から、後藤¹⁾は、(1)目的的功能者(学芸員など)(2)手段的業務者(事務員など)(3)統合的機能者(館長など)に分類している。博物館の目的機能を果たすための専門的職員は、法的にも「学芸員」として位置づけられているが、その学術と技芸の内容とは何であるのか、学芸活動の理論と実践とはどうあるべきかは、まだ十分明らかにされていない。博物館の学芸活動としては、資料収集、整理保存、調査研究、教育普及の4分野があることは認められているが、これに従事する学芸員及び学芸職員の質と量こそは、博物館の運命を決するといつてよいが、その実態はきわめて弱体である。

日本博物館協会が、1974年度の事業の一環として実施した実態調査の報告²⁾によると、職員関係資料・総合博物館の事例では、全国平均1館当りの職員数は17.7人。都道府県立では29.6人、市町村立では8.7人、私立では11.4人となっている。このうちの学芸員数は、都道府県立が4.6人、市町村立では1.7人、私立では2.4人で、学芸員数が職員数中の1～2割程度でしかないことが指摘されている。いっぽう表1のように、1981年での実態においても、専任学芸員は、1館平均わずかに1.8人にすぎず、これに学芸員資格を持たないで、実質的に学芸業務に従事している学芸職員の存在を加味しても、専任公民館主事、社会教育主事、図書館司書等と比べ、博物館学芸職員は、数のうえだけでも貧困な実態にあるといえる。文部省の設置基準や「各博物館に専任の学芸員を設置し、充実するとともに、これら学芸員が博物館に定着し、専門的技術を発揮できるよう、処遇改善等の措置を講じなければならない。」とした社会教育審議会の答申(1971年)があるにもかかわらず、博物館の心臓部ともいえる学芸員及び学芸職員の絶対数は、公立館園が続々と誕生している現況の中でも、少しも改善、充実されていない。

こうした現状の中で、博物館専門職員としての学芸員論については、数多くの論文が発表され論議もされてきた。学芸員の専門性について、後藤³⁾は、普通技術的専門性と個別科学的専門性に大別しているし、倉田⁴⁾は、(1)資料の収集・調査研究部門、(2)資料の保存科学的研究と実施、(3)展示を中心とした教育普及の研究と実施の3部門に分科する必要性を説いている。また倉田は学芸員論⁵⁾の中で、『博物館の目的からいって、学芸員の業務を専門化した理想的な状態は、鶴田氏の説かれる(1)収集保存についての専門実施者としての学芸員、(2)収集保存に関する研究者としての学芸員、(3)もの(資料)そのものを研究する学芸員、(4)教育普及に関する研究をする学芸員、(5)教育普及を実施する学芸員の5つのグループに分けることであり、さらにはまたこの中で専門細分化されることであろう。～しかし現況では一足飛びにここまで細分化しなくても、少なくとも、(1)科学技術者としての学芸員、(2)(科学)研究者としての学芸員、(3)教育者としての学芸員の三種を専門化し、分野に応じて最低3名の学芸員を一組として設置～』と述べ、また『現在の学芸員制度における学芸員は、

表1 登録博物館・博物館相当施設に限った博物館数・職員数・学芸員数

区 分			登録・相当 博物館数	一館当り平均職員数 (カッコ内は専任職員構成比)	一館当り平均学芸員数 (カッコ内は専任学芸員数)
合 計			578	実数8,797人 (一館平均15.2人)	実数1,195人 (一館平均 2.1人)
登 録 博 物 館			355	専任7,711人 (一館平均13.3人)	専任1,062人 (一館平均 1.8人)
博 物 館 相 当 施 設			223	専任率 .85.9%	専任率 87.5%
種 類 別 内 訳	総 合	史	80	一館平均11.1人 (専任率74.9%)	一館平均 2.4人 (専任 2.3人)
	歴 史	174	“ 8.4人 (“ 90.6%)	“ 2.0人 (“ 1.7人)	
	美 術	160	“ 11.2人 (“ 80.3%)	“ 2.4人 (“ 2.2人)	
	科 学	67	“ 15.6人 (“ 86.3%)	“ 2.1人 (“ 1.8人)	
	動 物	30	“ 47.3人 (“ 98.5%)	“ 1.6人 (“ 1.5人)	
	植 物	23	“ 16.2人 (“ 85.9%)	“ 0.7人 (“ 0.4人)	
	動 植 物	10	“ 65.3人 (“ 97.5%)	“ 1.1人 (“ 0.5人)	
	水 族 外	30	“ 33.6人 (“ 80.1%)	“ 1.6人 (“ 1.4人)	
内設置者別	国 立	28	“ 16.9人 (“ 83.2%)	“ 2.0人 (“ 1.9人)	
	公 立	269	“ 14.6人 (“ 87.2%)	“ 2.5人 (“ 2.3人)	
	私 立	281	“ 15.6人 (“ 85.1%)	“ 1.7人 (“ 1.4人)	

※1981年5月1日現在

※文部省大臣官房調査統計課『指定統計第83号 社会教育調査報告書 昭和56年度』大蔵省印刷局 1983年

極端にいて、広い教養を持ち、分析的な専門研究の成果を十分とり入れられる学問的基礎を持ち、それを教育的に効果的に、資料(もの)を用いて展示を通して、社会教育の目的を達成することと思われる』と述べている。そして現実の組織の中で、学芸員はいかなる状態にあるかについて、倉田⁶⁾は大まかに(A)学問志向型 (B)教育志向型 (C)無志向型の3つの学芸員タイプを指摘している。

また新井⁷⁾は、『学芸業務の分化が、欧米諸国に比べ、進んでいないところ』に、学芸員の行動実態が雑芸員にならざるを得ないとし、期待されることとして、『研究と教育を分離するのではなく、Curator は、研究面では学術的専門領域の研究(動物学とか地質学とか考古学とか)と、博物館理論学(Museology)の研究を担当し、教育面では、学習や研究を目的として訪ねる来館者の教育に当る。そして Museum teacher は、研究面では、専門科目の教材化の研究と博物館教育の実践的研究(Museography)に当たる一方、教育面では、小中学校の児童生徒や一般市民のいわゆる見学者の案内や指導に当たるといふ分化~研究と教育の二重構造の組織化』を説いている。

いずれにしても、学芸員及び学芸職員の絶対数が貧困な実情の現実論としては、学芸活動推進のためには、学芸職員は多芸員、雑芸員たらねばならない運命を背負わされている。その自覚を第一歩とし、実態を正しくみつめ分析し、学芸員のあるべき姿、学芸活動の理想像を求めつつも、学芸活動の全体構造をふまえた実践をこそ積み重ねなくてはならない。実践活動を通して、博物館専門職としての特殊性・専門性を明らかにするとともに、学芸職員集団の質と量の高まり・充実をめざす必要がある。以上のことから、資料紹介展の実践例を報告し学芸活動の参考に供するとともに、実施に至るまでの学芸活動経過及びアンケート調査の分析から、学芸員としての専門性と問題点の所在を明らかにしようとした。なお、この資料紹介展の原案は、自然分野で十分検討立案したうえ、学芸部全体会でも、解説パネル原稿、全体構成を中心に検討を重ねたうえで決定したものである。北米産の植物標本は、CARNEGIE MUSEUM OF NATURAL HISTORY から送られてきたものであり、日本と北米に共通する植物の分布論については、Dr. D. E. Bufford (HARVARD UNIVERSITY) から論文の提供を得た。両者には、心よりお礼申し上げる。

2 資料紹介展「ふるさとと北米の植物」実施内容の概要

(1)企画・立案までのいきさつ

筆者⁸⁾は先に、資料収集、整理保存、調査研究、教育普及という4本柱をふまえた学芸活動の事例を、『博物館の全機能をふまえた学芸活動のあり方』と題して発表した。学芸員のあるべき姿・理想像はどうあれ、現実的には、自分の専門とする分野(植物)については、ひとりで資料収集から教育普及までを担当しなければならないし、その多芸員さの中にこそ、逆にいえば現実論的特殊性・専門性があるとも考えられるからである。

過去の「帰化植物」展実施に際し、日本に帰化している種の原因地で野生状態の写真展示を考え、ヨーロッパ及び北米の博物館へ、写真資料提供の依頼をした。結果としては入手できず、写真展示は実現しなかったが、これを機に、カーネギ自然史博物館との植物標本交換が始まった。岐阜県の東濃地方には、ハナノキ(カエデ科)が自生しているが、その近縁種が北米東部に隔離分布している。自然史上の象徴的な存在であり、東濃地方のハナノキ自生地は、その多くが天然記念物に指定(国、県、市町村指定)されている。この他にも、日本と北米東部とは、起源を同じくする近縁植物が、数多く隔離分布しているが、その事実はあまり知られていない。そこで、カーネギ自然史博物館から送られて来た北米の植物標本と、当館が県内各地から収集した植物標本とを用い、地史的な分布のつながり・国際交流の激化にともない目立つようになった帰化植物の実態等を紹介し、地球的視野からふるさとと植物への興味と関心を高めるとともに、植物についての基礎知識の普及につとめようとした。

(2)展示のねらいと留意点

- ①ねらい
 - ◎学名のしくみを知らせる。
 - ◎北アメリカ東部には、日本の植物と近縁なものが多くあることを知らせる。
 - ◎地史的な植物分布の具体例を知らせ、歴史的な自然観を養う。
 - ◎社会の発展により、植物の分布に、人為的な変動が起っていることを知らせる。
- ②留意点
 - おし葉標本は、研究資料として保存するのが本来の目的で、色があせ平面化しており、「もの」としての展示効果は乏しいが、おし葉標本が物語る「事実・真理」は人々の心を魅了するはずである。標本を見せるだけでなく、それを中心素材とし、副教材を活用することによって、分布地理的な事実を提示するようにする。

(3)展示構成の概要

会場での展示構成は、図1のようであり、各解説パネルの原稿は下記のものであった。

P-1 はじめに……ふるさと岐阜県の東濃地方には、他の地方では見られないハナノキ(カエデ科)が生えています。その多くが「天然記念物」に指定されていますが、それはなぜでしょうか。太平洋を越えた北アメリカの東部には、日本とよく似た落葉広葉樹林があります。そこに生えている草木には、分類学的に日本と共通した植物がたくさんあります。このように、遠く離れていても、同じ起源の植物が生き残っているのかもしれませんが。この資料紹介展では、北アメリカのカーネギ自然史博物館から送られてきた植物標本と、当館所蔵の岐阜県産植物標本とを使って、地球的視野から自然史の“一こま”を紹介します。

P-2 学名とは……*Anaphalis alpicola* Makino という横文字は、万国共通の植物名(学名)で、ラテン語で書かれています。*Anaphalis* は、ヤマハハコのなかというグループ名(属名)です。*alpicola* は種小名で、“高山帯にある”という意味です。最後の Makino は名づけ親です。(牧野富太郎博士)学名とは、私たちの姓と名のうしろに、名づけ親の名を加えたようなものです。横文字が読めなくても、この学名のつくりを知っていると、*Cirsium* ~とあればアザミのなかま、*Taraxacum* ~とあればタンポポのなかまであることがわかります。

北アメリカ東部の植物



図1 北アメリカ東部の森林

北アメリカ大陸を、西から東へ横断してみましよう。中西部の乾燥した草原を横切り、東部に近づくと、フナ・カエデ・シラカンバの林が出現します。思わず日本の森林景観が思い浮かび、「日本から豊かかって、しだいに東海岸に近づくと、なぜこつと植物がよく似てくるのか」と、ふしぎに思えます。両地域にあるよく似た植物を見てみましょう。

写真1 P-3 (コーナー解説パネル見本)

ツンドラと日本の高山植物



図2 ツンドラと日本の高山植物

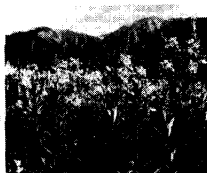


図3 日本の高山植物

北極に近い寒帯には、永久凍土層があります。ツンドラといはいく低木をまじえた草本植物の世界です。一方飛騨山地の標高2500m以上の高地は、寒冷な気候のために、やはり小低木や草本植物の世界です。この高山植物の中には、ツンドラの植物と形態がよく似ており、祖先を同じくするものが多くあります。かつての氷河時代に、北方から日本列島を南下し、暖かくなった現在、寒冷な山頂近くにとり残されたのです。

この高山植物の中には、ツンドラの植物と形態がよく似ており、祖先を同じくするものが多くあります。かつての氷河時代に、北方から日本列島を南下し、暖かくなった現在、寒冷な山頂近くにとり残されたのです。

写真2 P-5 (コーナー解説パネル見本)

P-4 比べてみましょう……北アメリカ東部の植物と、岐阜県内でみられる植物とを、一部分ですが同じな科や属ごとに、まとめて紹介します。形態的にひじょうによく似たものや、かなり違ったものもあります。

P-6 異なる植物のなかま……これまで見てきたように、日本と北アメリカには、共通した植物がたくさんあります。地球の歴史の中で、同じ祖先から分かれたものが、遠くかけはなれて分布しているのです。しかし一方には、その土地だけに特産する植物もあります。ここでは、北アメリカには生えていても、日本には生えていない植物(日本にない属)を紹介します。

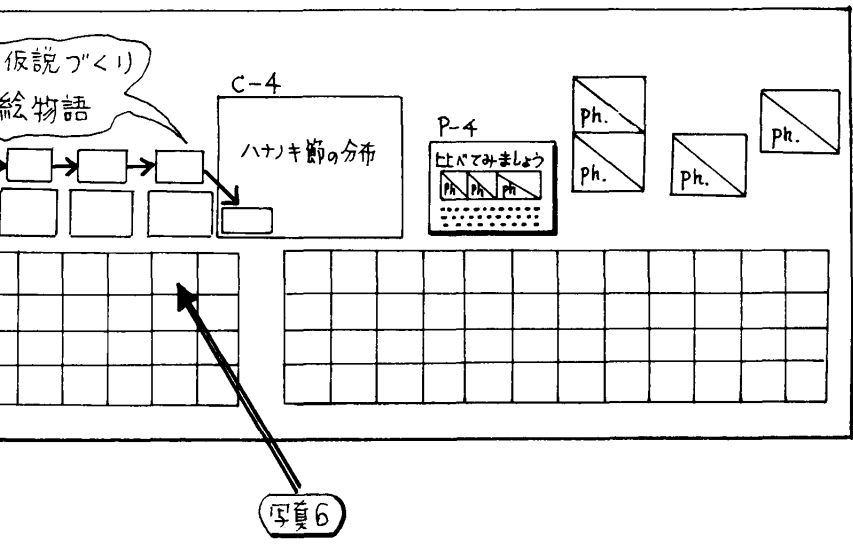
P-7 日本の特産植物……日本をふくめたアジアの東部に生えていても、北アメリカには生えていない植物もあります。(東亜の固有植物)その中には、さらにせまい日本列島内だけにしか生えていない日本の固有種もあります。北半球の各地に、かつては広く分布していたものが、日本だけに生き残っている古い植物か、日本で発生し分化の途中にある新しい植物かのどちらかです。

P-8 急変する植物社会……人間社会の発展とともに、国際交流が盛んになりました。そして輸入物資にまぎれて侵入するような外国の植物が、新天地に住みつくようなことが起ってきました。自然の歴史によるものではなく、人間の社会生活とのかかわりで、本来生えていなかった土地に根づいた「**帰化植物**」が、世界各地の都市部・人里周辺で、今、目立っています。

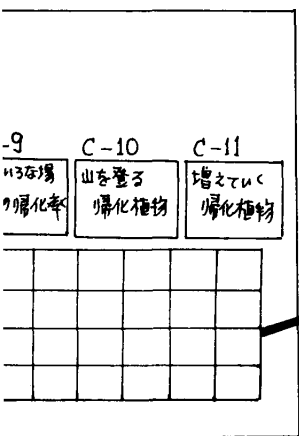
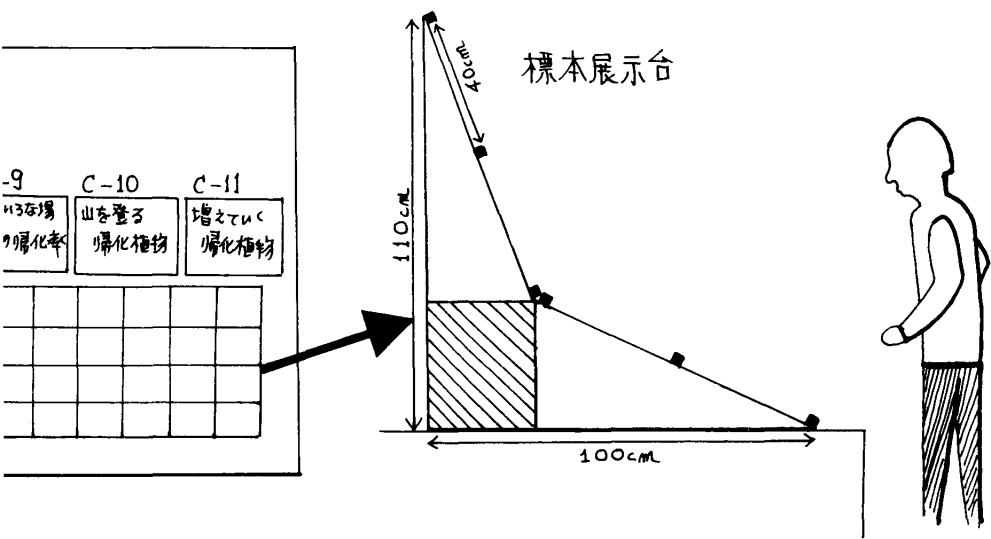
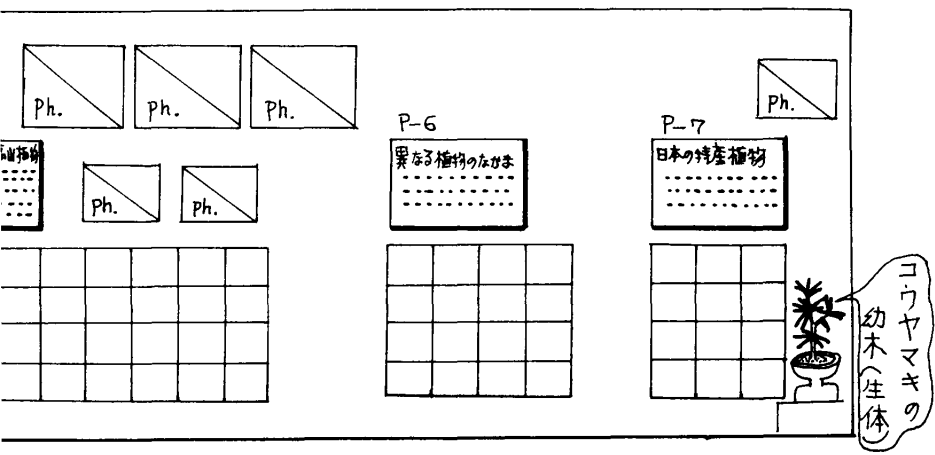
P-9 北アメリカへ入った帰化植物……北アメリカ大陸へも、世界各地から帰化植物が入り込んで、植物社会を変化させています。これらの大部分は、日本にも帰化しており、あちらこちらで見ることができます。帰化植物には、キク科やイネ科の植物が多いのはなぜでしょうか。

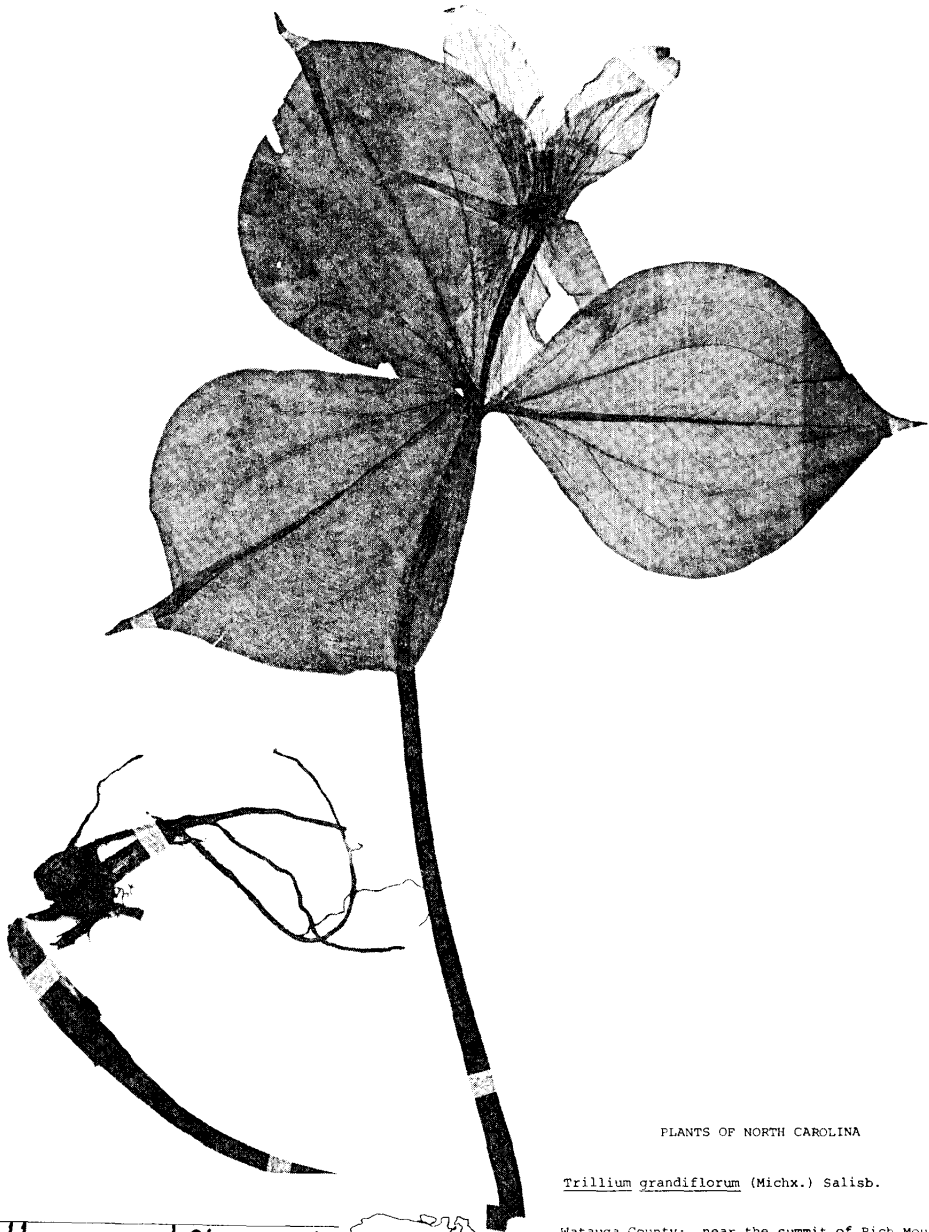
P-10 北アメリカから日本への帰化……日本では、明治時代になると帰化植物が目立ちはじめました。第二次世界大戦後、工業化、都市化、貿易の拡大にともない、急激に帰化植物数がふえ、今では約1,000種も記録されています。はじめはヨーロッパ産の植物が多かったのですが、ここに紹介するように、今日では、北アメリカ産の植物が多く目立ってきています。

2)



記号
P, 解説パネル
C, 図表パネル
Ph., 写真





PLANTS OF NORTH CAROLINA

Trillium grandiflorum (Michx.) Salisb.

Watauga County: near the summit of Rich Mountain (Howard's Knob); north of the city of Boone. *Quercus rubra* forest. Elevation ca 1600 meters. 36°14'N; 81°42'W.

D. E. Boufford 20943 16 May 1979
E. W. Wood

HERBARIUM, CARNEGIE MUSEUM (CM), PITTSBURGH, PA.

Trillium grandiflorum Salisb.

タイリンエンレイソウ ユリ科



図2 展示標本の一例

(4) 展示の実際面で、

① 標本の展示に際し

標本のラベルは、図2、3、4に示したように、北アメリカ産のものには、送られてきたラベルとは別に、学名を大きく書き、ハナミズキ、キバナトチノキ等、わかる限りの和名も記入した。

北アメリカ東部の植物からツンドラと日本の高山植物のコーナーまでは、写真3・6のように、北アメリカ産と岐阜県産の植物標本を、同じ属のものを並列して展示した。北アメリカから日本への帰化の最後のコーナーでは、ヒメジョオン、ハルジオン、キダチコンギク等、北アメリカから送られてきたものと岐阜県内で採集したものを、同種で並列し展示したが、スペースの関係から展示全種は並列できなかった。

展示に強弱、ポイントをもたせるために、はびこる帰化植物と題して、オオブタクサ、キダチコンギク、セイタカアワダチソウを実物大のまま乾燥展示し、これに北アメリカで採集された標本もそえ、イメージパネルを作成展示した。

② 補助教材づくり

理解を深めるために、図1に示したように、C-1植物の分類表からC-11帰化植物の増加まで、各種の図表パネルを自作した。写真4(C-7)は、世界各地の自然景観を提示し、日本の落葉広葉樹林と北アメリカ東部の落葉広葉樹林との類似性を浮きぼりにしようとした。全世界を絵地図図風に水彩で描き、これに各地の代表的な自然景観写真を配した。用いた写真は、旅行社で発行している各種海外旅行PR冊子他、主に、雑誌 National geographic から選んで、そのまま切り取りした。週刊紙、写真雑誌等、各種出版物で、これはと見えそうなグラビア写真等は、日頃から気をつけて収集しておく必要がある。

また、豆知識と題して、必要な解説・図表等を記入したものを随所に標本と同じ扱いで展示した。「学名と和名」「日本の特産コウヤマキと化石の分布図」「帰化植物とは」「帰化植物の日本への主な経路」等がその例で、図5に示したものは、「ツンドラと日本の高山植物」コーナーの標本中に展示したものである。

この他、図1に ph. で示したように、随所にカラー写真を配し、会場全体に色彩美をもたせる他、「北アメリカ東部の植物」コーナーでは、科学史の一端をカラー絵で提示し、自然史への理解を高めようとした。(写真7~11)

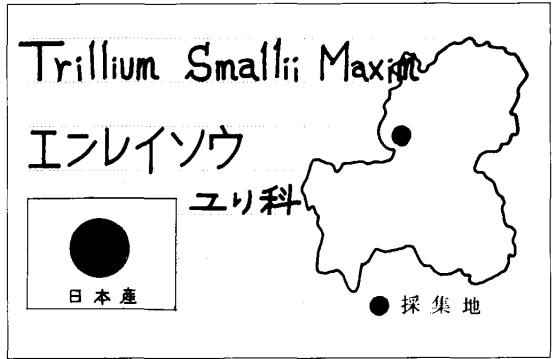


図3 岐阜県産植物標本のラベル

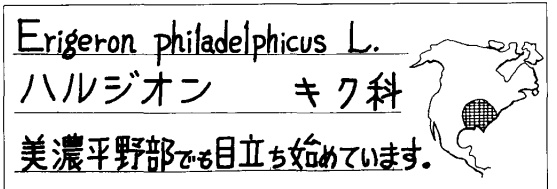


図4 北米から日本へ帰化した植物のラベル



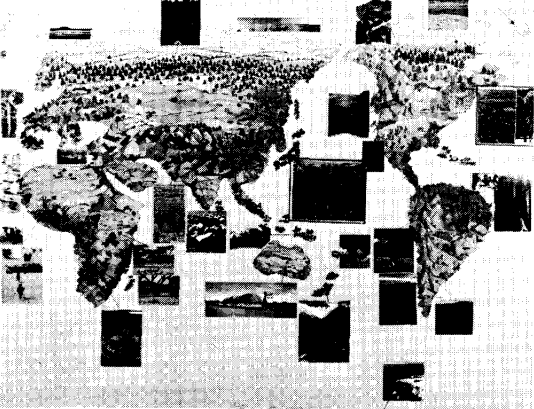
図5 台紙を使った豆知識の一例



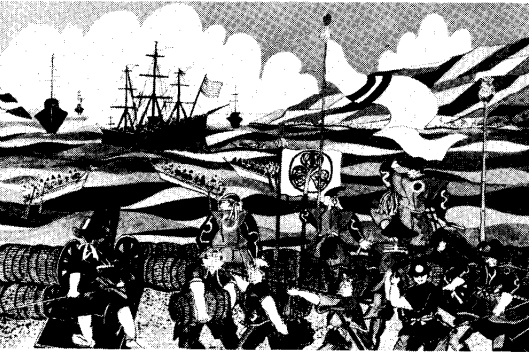
↑写真3 日米標本の並列展示

↑写真4 C-7の大パネル

世界各地の自然景観



↑写真7 A. Gray 仮説づくりの絵物語展示 その1

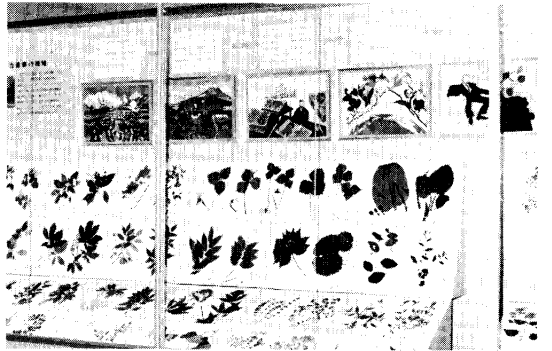


1853年、黒い大きな船が浦賀の沖に現れました。ペリーにひきいられたアメリカ合衆国の艦隊で、日本に開国をせまりました。「黒船だ、黒船が来た」と、日本の人々は大きわぎしました。



↑写真5 帰化植物のコーナー

↑写真6 北アメリカ東部の植物コーナー



↑写真8 その2

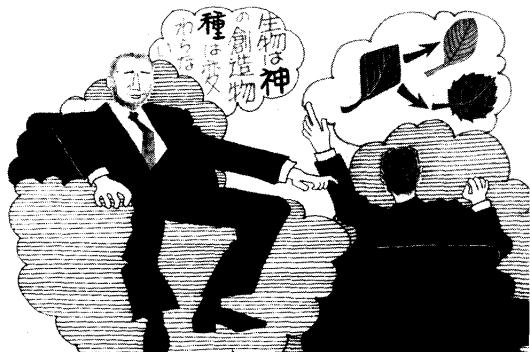


日本人が大きわぎをしているのに、乗員のうちの二人が、上陸したときに植物を採集し、おし葉標本を作りました。これらの標本は、ケンブリッジにいる植物学者グレイ教授にとどけられました。



1年後には、グレイ教授も艦隊の乗員となり来日しています。帰国後、手もとに集められた580種もの日本の植物標本を前にして、「なぜ遠く離れたこの二つの地域の植物が、こうもよく似ているのだろうか」と考え込みました。

↑写真9 その3



当時は、まだ進化論が世に出ていません。ボストンの学界で力のあった動物学者アガシ教授の「生物は神の創造物で、種は変らない」という考え方が主流で、「同じ祖先から分かれた」とするグレイ教授と大論争となりました。

↑写真11 その5



「今、温帯にあるこれらの植物は、新生代の第三紀には、北半球を東西に連続して広く生えていた。それが氷河期に南にさがり、氷河が去り暖かくなった今、かけ離れた両地域に残っているのだ。」(仮説)と、グレイは考えました。

↑写真10 その4



↑写真12 その6 ↓文字部分のみ拡大

当時グレイ教授が考えた仮説は、今日古生物学が進歩し、北半球の広い地域から発掘された植物化石の数々が、正しかったことを証明しています。ハナノキの自生地が、なぜ天然記念物に指定されているのか、おわかりでしょう。

昭和59年2月10日～4月8日までの会期中の総入館者数7,271人のうち378枚の記入回答があり、回答者率は5.2%であった。

記入回答用紙378枚のうち、全くふまじめ回答(ただの落書き、無関係なたわごと等)は165枚(43.7%)あった。質1については、「標本が良好できれいにできている。これほどまとまって標本を見るのは初めて。保存するだけではもったいない。参考になります。今後も続けてほしい。ていねいな標本で感心した。」等々と肯定的な意見が多かった。「カラー写真や着色図を全部つけたら。形などはこれでもよいが、やっぱりおし葉よりそのままの方を見る方がよい。」といった声もあり、標本展示での限界と、自然学習の野外行事の大切さがうかがえた。質2については、「実感が出てすばらしい。たくさんほしい。立体的に理解できてよい。興味・関心を引く工夫として成功していると思う。本の写真・絵よりも種類毎のちがいがよくわかる。実物を見るのと同じ効果がある。あまり生々しいので何度も見直しました。」等々展示効果の良さが認められている声が圧倒的であった。おし葉標本(実物資料)と併用するなど、植物分野の教育的展示手段としては重要視すべきものである。

質3については、記述式のため、内容も多岐に渡り、定量的にとりまとめられないが、20人以上の人が挙げている内容としては「仮説づくりの絵物語」「日米の植物の共通性」「はびこる帰化植物」次いで「世界の自然景観」(12人)「標本の多いこと」(5人)「標本の送られ方」(3方)その他、「写真が美しい」「ハナノキの分布」「日本の特産植物」「日米の植物のちがいが」「スミレのコーナー」等、また一般の方の回答、「日本と北米東部の植物分布が似ていることがよくわかる。思想や主張のある優れた展示企画でした」に、実施してよかったとの感激を味わうことができた。

質4の「よい点」では、「手づくりの暖かさが感じられ、系統立てての展示に努力が生きている。イラストや図解があり、とてもわかりやすい。標本も多く、視覚的でよい。写真が美しい。もっとあるとよい。違いや似た点と比較できてよい。資料が豊富である。送られてくる標本コーナーのように、裏方の仕事面の展示を、より多くすると、ただのおし葉でなく、その価値がより広く伝わるだろう」等があり「わるい点」では、「標本の製作方法・コツなども示してあると、標本作りへの関心が高まる。標本一点一点にカラー写真をつけるとよい。場所が狭くこみいった感じである。似た植物の区別点などを、くわしく説明・解説してほしい。英語ラベルの訳がほしい。生きているものが見たいなあ。」等があった。まじめな回答を記入していただいた213枚のアンケート結果から、『豊富な実物資料(もの)を土台とし、確かな展示シナリオを書き上げ、視覚的な補助教材・手段を使い、わかりやすい表現で、質の高い内容を展示する』ことを指摘されたたと受け止めている。

今後の参考にします、ご協力ください。

資料紹介展 アンケート用紙

※あてはまるところに、○をつけてください。

性別	男	女	小学生	中学生	高校生	一般
----	---	---	-----	-----	-----	----

質1. おし葉標本は、展示してみせることよりも、研究資料として保存するためのものですが、会場でご覧になっての感想をお書きください。

質2. スミレ6種は、複製(レプリカ)を展示しています。レプリカ展示についての感想をお書きください。

質3. この資料紹介展で、一番印象に残っていること、内容をおしえてください。

質4. この資料紹介展で、わるい点・よい点をおしえてください。

◎わるい点

◎よい点

ありがとうございました。箱の中へ入れてください。

図8 アンケート用紙



3 学芸活動の専門性と活動内容

(1)「物」の同定という基本作業について

今回の展示標本は、これまで機会あるごとに県内各地から採集した標本と、交換標本とである。採集・寄贈・寄託にしろ、博物館に収集される物は、そのままでは博物館資料とならない。素資料を価値判断し、学術的・教育的価値を明らかにすること、資料を生かして使うための条件や方法を明らかにしなければならない。この過程で、植物に限らず自然資料については、「同定」というきわめて高度な能力が学芸員に求められる。生物の種同定は、長年の野外調査活動の体験を経て身につくものであり、きわめて専門的な知識能力である。また、1人の人間で、全ての植物の同定力を身につけることは不可能なことであり、他の大学・博物館等の分野別専門スタッフに同定依頼をしなければならない。そうだからといって、博物館の学芸員に、同定力がなく、全て外部依頼しているのは、博物館の存在自体が疑われる。地域の動植物を解明するという究極の課題追求のために、学芸員は、その専門性の第一歩として、同定の力量が問われるはずである。新聞社・放送局はもとより、各種研究会、同好会あるいは学校、それに個人の方々からも、博物館へは「種同定」についてのレファレンスが圧倒的に多く寄せられるし、館の教育行事、自然観察会等の実施においても必要とされる能力である。資料の寄贈に際しても、博物館に定着した経験豊かで、確かな同定力のある学芸員の存在があってこそ、安心して寄贈していただけるといった事例は、全国各地の博物館で証明済みのことである。

なお植物標本の採集・製作において、筆者は展示のことを考え、原色保持に努め、今回の展示品は、寄贈品等を使用しなかった。従来通り新聞紙で乾燥しているが、できる限り現地でベニヤ板製自作の野冊にはさみ、帰宅後交換し、次の日は少なくとも2回交換と、初めほどこまめに新聞紙を交換している。比較的どれも美しく緑や花の色を残し、きれいな乾燥標本を得ている。展示を考えた、原色保持の標本作成技術の開発は、学芸員に課せられた研究内容のひとつと考えている。

(2)「物」にまつわる調査研究について

学芸員に課せられた調査研究には、大学や研究所等のそれと同質の面がある。特に分類学、分布地理学、生態学などがあるが、これらの分野でも、博物館ならではの、その地域についての研究業績は、博物館が目的とし対象としている内容にかかわる確実性、信憑性、責任性の問題として学芸員に問われるし、博物館が社会から信望を得るために欠かせないことである。今回のようなテーマの展示にかかわらず、広く岐阜県内各地から資料収集を行うとともに、岐阜県の植物分布地理学等については、体験的知見を持たねばならないし、植物学全体での、専門研究の成果を十分とり入れる学問的基礎及び各種学会等との個人的な人間相互のつながりが、学芸員に求められている。

日本列島の動植物を明らかにするために、大学や国立科学博物館等の標本庫を中心に、多くの資料が保存されている。これまでの過程には、数知れない全国各地の同好の方々、アマチュアの方々の資料収集の努力があったはずである。しかし、全体的な生物相が明らかにされたとはいえ、地方地方の生物相はまだ未解明で、岐阜県の場合は、その資料収集・保管もやっと緒に着いたばかりであり、岐阜県植物相の解明は、岐阜県博物館植物分野の最大の課題である。地元の大学、岐阜大学教育学部生物学科植物分類研究室、岐阜薬科大学植物生態研究室及び、当館自然分野、岐阜市少年科学センター、それに県内各地に在住の植物研究者たちを含めた「岐阜県植物研究会」が一昨年発足した。大学と博物館と個人とが、有機的に結びついた自然史研究の地道な活動体であり、こうした基盤に支えられてこそ、博物館の資料収集・調査研究はもとより、各種展示内容も充実できるはずである。すでにその会員より、飛騨一円からの採集標本約2,000点が当館に寄贈されている。学芸活動の一端に、こうした地域に根づいた研究団体等との協力・援助も含まれるし、むしろ積極的に活動の場、資料収蔵の場とならねばならない。今回の展示内容でも多くの教示を得ている。

一方、博物館独自の調査研究面として、「物」の収集・保管・公開・教育という機能と結びついた内容があるが、全般的には、この面での実践が遅れていると思われる。植物標本の原色保持法、標本の防虫策、あるいは分類展示としての取蔵庫標本収納法等「もの」にかかわる技術面での調査研究がある。また「もの」とヒトとの結びつきにかかわる教育的調査研究も欠かせない。今回行ったアンケート調査も、そのささやかな一面的調査である。おし葉標本を中心とした展示は、全国的にもあまり行われていないが、「もの」を見せるのではなく、「もの」で見せることの一実践例として、来観者の受けとめ方、反応をみようとしたものである。この他、常設展はもとより各種展示会での見学者の動向調査、自然教育全般の理論、教材、カリキュラムの開発研究、展示解説の手法等々、博物館ならではの教育的実践研究課題は山積しているといえる。

(3) 展示活動面で

博物館での調査研究の成果は、学芸員の手により論文発表されることによって社会に還元される一面があるが、それだけであつたら大学や研究所等の研究者と変わらない。倉田の指摘した学問志向型学芸員は、学問探究への志向ばかり強く、教育普及やその方法、手段については関心を示さない。極端な場合には、象牙の塔にこもりがちで、学問的業績はあげても、教育普及活動はほとんど実施しない…等非難されても仕方がない。学術的な最新の情報を、「もの」という具体物を通して、不特定多数の人々に「わかりやすく正確に、展示公開発表する」ことこそ、博物館独自の機能であり、学芸員の任務である。調査研究の成果が、常に常設展で発表されたり、特別展等に結びつくとは限らないが、機会をとらえ、少しでもそうした展示発表の場を設けるよう努力すべきである。当館の場合は、そのひとつが今回のような資料紹介展であり、植物分野では過去に「帰化植物」「植物の世界」他分野では「古生代の化石」「ふるさとの大地をつくる岩石」「岐阜県のは乳動物」「野鳥」「百年公園の動植物」等を実施してきた。また玄関ロビーでは、資料収集や調査研究の成果を生かした「スタディオコーナー」を設け、動・植・地学3分野の輪番制で、小テーマ展示を実施している。これは、定期的な展示発表の場として位置づけられている。スタディオコーナーの実践については、博物館学雑誌第9巻1-2号合併号に発表⁹⁾したので参照されたい。

常設・特別展示をはじめ、博物館の展示内容は、調査研究の裏付けがあつてこそ説得力も迫力もあるはずである。学芸員が「もの」について、学問的専門分野を持たないで、また調査研究業績を持たないで、他人の研究成果や書物から得た知識の伝達だけに満足しているのであつたり、極端な教育志向型タイプの学芸員であれば、学問的知的生産は望めないし、独自の展示内容は期待できない。貸会場や百貨店等での展示会と、博物館ならではの教育的配慮にもとづく展示会との差は出てこない。佐貫¹⁰⁾が『博物館では館員に質問すべきである。しろうとと専門家が接触する機会は、これ以外にない。』と述べているように、今日の知的な学習社会では、「もの」についての体験的研究活動家との接触こそが社会から博物館に求められている。

以上のことからすると、学芸員としての資質としては、「もの」についての学術的専門研究者であることを基盤にして、展示シナリオを構成し、補助教材を創意工夫し、展示を構築する知識・技能者であらねばならない点に、大きな特殊性・専門性があるといえる。

(4) 各種教育活動面で

展示解説を事例としても、それは、単なる知識の受け売り・パスガイドのように、一方的に説明を加えればよいといった単純なものではないはずである。展示とは、「もの」が語りかけ、見る人が主体的に自己学習の素材として活用するものである。どのように感じとるかは、学習者自身の主体性にまかされる面がある。展示解説は、自主的・主体的な学習を援助するもので、疑問の投げかけ、観察の視点、比較の窓、補助説明、参考資料の提示など、しかもそれが入りまじったものといえる。そのうえ、参加者の実態、興味関心の度合や知的水準等を、その場で即座につかみとり、臨機応変

に教育活動をしくまなくてはならない。展示解説のみならず、自然観察会、自然教室、講演会等、あらゆる教育行事面で、担当する学芸員には、研究者としての専門性ととも、指導者としての専門性（学校教育現場とも異なる指導技術・教材教具の創意工夫・開発等）とが同時に要求されている。現行の博物館法及び現実論からして、学芸員には、学問的専門研究者と社会教育指導員としての二面性を併わせ持たされていると考えるべきである。

一方、図録・解説書、展示見学の手引等、各種刊行物は、博物館学芸活動の実績となり貴重な文献財産となるものである。博物館の教育普及活動の大切な一面である。その刊行にいたるまでの実務面では、調査研究の実績を土台に持つことは当然として、原稿の執筆、原画の作成等、学芸員には多種多岐にわたる技能が要求される。定期上映会のためのスライドの自作、その中で用いる図表等の作成、写真撮影の技術はもとより、フィルム現像、引伸し技術等の写真技能は、学芸活動の全領域にわたって欠かせない資質といえる。

4 まとめ

(1)博物館の展示は「もの」を見せるのではなく、「もの」で見せることである。そのためには、実物資料を豊富にもち、確かな調査研究の成果を背景にし、視覚的な補助教材・手段を駆使し、質の高い内容の展示シナリオを作成しなければならない。

(2)学芸活動には、資料収集・整理保存・調査研究・教育普及の多種多様・多岐にわたる活動内容があり、それぞれのどの活動内容においても、特殊な知識技能・専門性が必要とされる。学芸業務の分化がなされず、学芸員及び学芸職員の絶対数が不足している日本の現状では、資料収集・整理保存・調査研究・教育普及という全機能をふまえた学芸活動が、学芸員及び学芸職員に課せられていると考えるべきである。

(3)1人の人間の能力には限度があるため、地域の各種研究団体、同好会等との協力体制を学芸活動の一端として位置づけ、資料収集から教育普及にいたるまでの全ての学芸活動実践面で協力・支援が得られるよう、学芸員は、専門分野での外部学会、研究団体の活動に積極的に参加すべきである。

(4)今日の学芸員養成制度では、学芸員有資格者＝学芸員とはいえず、長年の実務担当、学芸活動の実践を重ねて、実質的な「学芸員」が養成されると考えるべきである。そうした経験者集団の中でこそ、将来的には学芸業務の分化を考えていく必要がある。

(5)学芸業務を分化する場合、後藤¹¹⁾が指摘しているように、『資料課・管理課・企画課・調査課・普及課』などとしても、相互に不干渉、不介入で、個々別々に活動や業務を行っては、博物館の機能が十分果せないことは明らかである。資料収集・整理保存・調査研究・教育普及の各活動は、相互に関連し段階性・順序性があるものであり、学芸員及び学芸職員を区分して固定化すべきではない。学芸活動の中で、「資料収集」「整理保存」「調査研究」「展示の企画・実施」「教育活動の実務」等を段階的に体験する学芸職員集団として、組織として機能分担する方向を目指すべきである。

参考文献

- 1) 3)11) 後藤和民 1978:『博物館概論』-「博物館の運営と職員」 学苑社
- 2) 新井重三他 1975:『わが国の博物館～その現状と課題』 社団法人日本博物館協会
- 4) 倉田公裕 1979:『博物館学』 東京堂
- 5) 倉田公裕 1974:『学芸員-その役割と訓練』 博物館学研究会
- 6) 倉田公裕 1977:『学芸員のタイプとその集団』博物館研究 Vol. 12, No. 3
- 7) 新井重三他 1979『博物館学講座1, 博物館総論』-「博物館の機能と活動」 雄山閣
- 8) 小野木三郎 1981:『博物館の全機能をふまえた学芸活動のあり方』博物館学雑誌第6巻1～2合併号
- 9) 小野木三郎 1984:『学芸活動発表の場としての「スタデー・コーナー」実践論』博物館学雑誌第9巻1～2合併号
- 10) 佐貫亦男 1982:『科学博物館からの発想』 講談社